

氏名	高島 依子			
ヨミガナ	タカバタケ ヨリコ			
学位の種類	博士（美術）			
学位記番号	博美第508号			
学位授与年月日	平成28年3月25日			
学位論文等題目	〈論文〉 織りの解体と再生 —The Hands of Anni Albers and Agnes Martin— 〈作品〉 織りの解体と再生			

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小林 正人
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	布施 英利
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	O J U N
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	杉戸 洋

（論文内容の要旨）

本論文は、キャンバスと絵具の関係における絵画の展開について論述するものである。

絵画とは、キャンバス上から始まっているのだろうか。なぜ、絵具は常にキャンバス上にあるのか。筆者はキャンバスと絵具を物質として同等に捉え、行為によって一つとして存在する絵画を探究している。キャンバス上で絵具を掻き集める。キャンバスを絵具で覆う。絵具を塗ったキャンバスを切り取る。絵具の形状を変容し並べる。キャンバスの糸目に沿って絵具を重ねる。絵具の集積を破壊する。これまで行ってきた制作のやりとりは、物質と行為を同時に強く存在させることである。近年の制作においては、紙筒に油絵具を入れ、キャンバス上で絞り出しながら何度も引き続ける。それによって画面を覆い尽くし、行為の連続による軌跡を積層させる。絵具が徐々に重なり一つの面になっていく過程は、経糸（たていと）と緯糸（よこいと）を織り込むことで生成する織物と共通するところがある。

そのような制作を行っている中で、テキスタイルデザイナーであるアニ・アルバース（Anni Albers, 1899-1994）の織物が絵画に見えた。それに対して、抽象画家であるアグネス・マーティン（Agnes Martin, 1912-2004）の絵画が織物のように見えた。二人の作品の見え方は、“絵画とは何か”という問いを投げかけているようだった。

筆者は2015年にアメリカ・コネチカット州にあるジョセフ・アンド・アニ・アルバース・ファンデーションにて2ヶ月間のレジデンスの機会に恵まれた。アルバースの残した資料（織物、スクラップ、布地見本、著書、織機）が絵画的織物の世界の入り口となった。アルバースの創作は、糸から始まり織りの構造に主眼を置きながら、美と実用性の両方を兼ね備えた独自の織物を創造している。バウハウス時代から、デ・ステイル、構成主義、パウル・クレー（Paul Klee, 1879-1940）の教育や創作、そしてアンデスの染織品を結びつける事に挑戦し、新たな工業テキスタイルを生み出した。そして、古代の織物の真の意味を深く理解し、絵画としての織物を創作した。彼女自ら「ピクトリアル・ウィーヴィング」、「絵画的織物」と呼ぶ新たな表現の境地を開拓した。

アグネス・マーティンの絵画の特徴は、水平線と垂直線からなるグリッド（格子）の構造でキャンバスを覆うことにある。行為の連続によって描かれた線は、彼女の手の痕跡を残し感情に働きかけ心に響くものである。それらの軌跡は繊細な揺らぎやズレといった偶然性が大きく関わっている。キャンバス上に鉛筆や絵具の線を引き重ね、二度とない瞬間の美を内包しながら物質が一体となる絵画を形成している。規則的なシステムにより描かれる絵画であるゆえ、ミニマリズムの歴史に属しているように見なされる。しかし、マーティンは非物質的な感情を呼び起こす絵画空間に興味を抱き、自己の抽象的な感情をグリッドに置換え具体

化している。筆者はその線の意味を探る為に、彼女の制作地であるアメリカ・ニューメキシコ州を訪れ、作品調査を行った。

両者を考察する旅を経て、岐阜県の織物産地を訪れた。様々な素材が交じり合う糸、糸が織り込まれる構造、膨大な布地見本、動力織機がシャトルを運び糸が積層する様子、織り上がった織物へ施す加工技術などを目の当たりにする。一本の糸から布地を織り上げていく光景は、全く異なるアトリエで制作している自身の姿と重ね合わせる事が出来た。一枚の布地を織り上げる機屋(はたや)という「場」を通して、一つの絵画作品を創作する「アトリエ」における自身の制作工程が浮かび上がる。

キャンバスと絵具の関係を探る意識は、アルバースの絵画的織物を考察したことにより物質である素材そのものへ向かい、マーティンの絵画により精神性へ、機屋によりそれらを織り交ぜるプロセスへ至る。本論文は、絵画の可能性を拓ける為にアニ・アルバースとアグネス・マーティンの作品の成り立ちを論考し、織物の製造工程に筆者自らの制作工程を重ね合わせ自作における絵画の成り立ちについて考察し記述している。アルバースが古代の織物を手で解体し彼女の作品で再生したように、糸、線、織物、絵画が錯綜する織りを解体する事でキャンバスと絵具が互いに交錯し合い一体となる関係を模索し、創作において再生することを目的としている。

(論文審査結果の要旨)

高島依子は、これまでの作品制作において、一本の糸から布を織り上げるように、絵具を糸のように細い線にしてキャンバスに描く絵画で評価されてきた。本論文は、そのような画家である高島が、「織りの解体と再生」というテーマで、比喩としての織りではなく、織りの工房そのものを訪ね、織りの意味を一から問い直し、そこに絵画の解体と再生を見いだそうとした試みと思索を、論文にまとめたものである。

本論文の構成は、全三章からなり、それに序章と結章がつけられている。

第一章の「織りの解体」では、高島が敬愛し、また高島の作品世界の先達ともいえる、アニ・アルバースとアグネス・マーティンの作品世界を検証することから始められる。高島はアメリカ・コネチカット州にあるアニが暮らした家を訪ね、糸から織りなされたアニの作品を呼吸し、そこに高島自身の作品の過去と未来に思いを馳せる。また画家アグネス・マーティンの絵画における「線」の意味の考察を通して、単なる工芸品としての織物ではなく、絵画と織物がつながる、線の構造と意味を探る。

続く第二章「機屋の工程から考察する織り」では、そのタイトル通り、織物工房である機屋を取材・調査し、素材、構造、道具、織り、表面、製品、それに機屋という場そのものなど、織りの事象を丁寧に紹介し、織りというものがあるような素材と現場から生み出されるものなのかを、具体的に検証する。

そして第三章「機屋から考察するアトリエ」において、機屋といういわば画家のアトリエとは無縁とも思われる工芸世界のような場と、そこから生み出される製品が、筆者の高島が考える「絵画」と、どのような共通点があり、そのようなスタンスに立つことによって、どのような新しい美が生み出される可能性があるかが展望される。

高島は、油画の支持体であるキャンバスが、糸から織られた布のような構造を持っている(=織物)であることに着目し、そこに糸のような細くした絵具を塗り重ねる制作方法に、織りの伝統と絵画との止揚、というものを見いだす。

2015年12月に東京藝術大学・大学美術館で展示された高島の作品は、一見すると工芸専攻の展示と見誤ってしまいそうだが、それが絵画を専攻したものの展示であることに気づくと、その展示の意味と、本論文の意味も、さらに新しい輝きをもって見えてくる。

このような織りと絵画に両足をつけて絵画(=織り物)を制作しようというスタンスは、本論文に記されてきた現場調査や考察をもって初めて明瞭になるもので、その点でこの論文を執筆した意味は、絵画の今後にとって価値あるものと考えられる。

よって本論文を、東京藝術大学における博士論文として、合格とする。

(作品審査結果の要旨)

私は、東京藝術大学美術研究科博士課程油画専攻高島依子の作品第一副査として、本学生の博士論文「織りの解体と再生-The Hands of Anni Albers and Agnes Martin-」及び展示された修了制作についての評価ならびに感想を記し、研究発表の報告を申し上げます。

高島依子は自身のこれまでの絵画制作に於いて、描かれるべき主題が一体どのように現実にキャンバス上に現れ得るか、その主題となるべきモチーフが纏う光や影、色彩、感情、立ち昇る精神性の生成のプロセスを一貫して探求している。筆を使わず、絵の具を絞り器に充填し画面上に線を引きのように縦横に絞り出し描いてゆく。それはまるでキャンバス上に紡ぎ出された一枚の織物のようである。そのような方法を以て制作を営んできた高島が自らの方法を更に深化させ、自身の制作原理と描きの根拠を可能な限り辿ることで絵画の普遍性に至ろうと思ったことは必然の成り行きであろう。高島は画集でアニ・アルバースのタペストリーを見てそこに“絵画”を発見する。それを契機として絵画を一つの織物と仮定したとき、その実践例としてテキスタイルデザイナーのアニ・アルバースの人と作品のリサーチへと駆り立てた。高島はアメリカのコネチカット州にあるジョセフ、アニ・アルバースファンデーションにレジデンシーアーティストとして滞在しそこでアニの織り、様々なテキスタイルサンプル、言葉、生活に触れることで作家の全体像に迫った。また同時に線の表象とも言える画家アグネス・マーチンの絵画に惹かれニューメキシコに飛び作品を体験する。そして、二人のアーティストの作品と生き方を辿るうちに自身のこれからの制作の開始ともいべき拠点の創出に向かうのである。帰国して彼女が赴いたのは岐阜県の織物生産の現場である。そこで産業の一連の工程とそれを運営してゆく組織の存在に触れ、高島の関心は次第に作品制作の根本的な組成の仕組みをその制作の初発に組み込むという計画に展開してゆくのである。キャンバス自体の制作から始める、そのための場所はアトリエが機屋を兼ねる場であること。未来の自分のアトリエのイメージは何度も描き換えられ修正、補足がなされやがて明瞭な姿、作業が身体に及ぼす様々な事態も細やかに想定され環境的機能的ものとなってゆくのである。論文はその内容に於いてはまだ論考も展開も不十分なところはあるが、高島の隧道を抜き進むような行動力と豊かな想像力はそれを補って余りある。論文発表の会場となった大学美術館に展示された一見“見本台”とも見えるテーブル状の板の上には、高島が日米でサンプリングした様々な布きれ、織物製品、夥しいメモ、ドローイングが展示された。板はそれらの重さを受けしなり、波のような連続形をなした。私には、或るところ”から当然の如く作家にゆだねられ、そこから開始され結実したものを作品と呼んで疑わない私たちの自明性を、いや、“或るところ”の創出からこそが本当の開始であり作品の全過程であると目論む彼女の思考の豊かさと質量がつくりだしている波形のように思えた。彼女の作品のための「素材」が今ようやく揃ったのである。展示された事物はどれも高島依子の絵画考であり絵画原論と言えるものであり、これから始まるであろう深く豊かな時空を予感していた。私はそこを高く評価し、博士号取得に相応しい研究業績でありまた本人の資質と判断した。

(総合審査結果の要旨)

高島依子は現在作家として順調なデビューを果たし、日々新作を求められ、制作をベースに生きている、今後おそらく10年、20年、30年、40年、50年、、、アートで食べていけるだろう数少ない人である。

アーティストであり、人生、女性のセンパイとして高島がテキスタイルデザイナーのアニ・アルバースと抽象画家のアグネス・マーティンを手本にし、自分の人生設計を兼ねた開拓精神にあふれる論文になった。タイトルは織りの解体と再生-The Hands of Anni Albers and Agnes Martin-

アニ・アルバースの織物を初めて画集で見た時 なんて美しい抽象画！と息をのみ、それがコットンの織物と知った驚き、絵画と何がどう違うのか？知りたくてアメリカ・コネチカット州へ行く。そこで本物の「素材感」に撃たれアニの使っていた道具、織りの製作工程を紐解きその秘密を求めた。そしてアニが機械織りをWallhanging、手織りをPictorial Weaving と呼んでいた事を知る。

次いでニューメキシコ州へ、鉛筆で生涯美しい線を引き続けたアグネスマーティン、直線を引くという規則を課し、ニューメキシコの空と大地の中、電気も電話もない簡素な家でアグネスはどのように暮らし、ど

のようなアトリエである線を描いていたのだろうか？彼女の「暖かい光」「幸福感」「喜び」とは？！秘密は線をひくための生き方、景色と関係があった。アグネスはアトリエの外にバスタブを置き外で入浴した。その時見た地平線、肌で感じた風や空気を纏ったままアトリエに入る。しばらく椅子に座って「その時」を待つ。「その時」が来ると立ち上がりキャンパスの前に立ちキャンパスにジェッソを塗り線を描き始める、、、人生の様に、、長い線を引くには小さい定規で。

アニのアトリエに在った手織り機とアグネスの小さい定規、バスタブをしっかりとポケットに入れて帰国した依子は杉戸先生の車に乗って岐阜県羽島の毛織会館/テキスタイル マテリアルセンターに直行する。羽島は毛織物産地であり、日本全国のファッション衣料用素材を集積した国内最大の資料館である。布地のサンプルが10万点以上あり、周辺には糸染め、織り、整理加工など各工程の専門業者が沢山居る。このへん高島の自分の未来を見据えたフィールドワークは素晴らしい！

事実彼女は此処で親機と出会い、実際の織物が作られている現場を見、それが自作のキャンバス作り、「織り機のあるアトリエ作り」というヴィジョンに結集することに成る。

第3章一機屋から考察するアトリエーは本論文中他の先生方にも特に評価が高かった章だ。

線を引くという行為の連続と手仕事の精神性に惹かれ、アニ アルバースの手、人生と共に在った彼女の手は糸をあの織り機でどの様に紡いでいったのか？またアグネス マーティンの見た風景、彼女の手は鉛筆と定規でどうやって毎回違う線を引き続けられたのだろうか？40年以上も。。

1本の糸は1本の線であり線が織り込まれてキャンバスになっていく。

「自分のアトリエにはキャンバスを作る織機を挿れたい。」と、高島依子は決心する。一 織機を挿れるということは織機が無いアトリエよりスペースが必要です。一と彼女は書く。

自分の絵画をキャンバスから作る、其処から始める、その為の織機のあるアトリエが以前のアトリエよりその分広くなると考える。それが高島依子の絵画の素晴らしさなのだ！彼女の博士作品、論文の成果だろう。